

## ダンゴムシのお家をつくろう

～ダンゴムシと触れ合い、友達と話し合いながら関心をもって関わる～

## &lt;これまでの取組&gt;

入園して間もない子どもが小さなダンゴムシを見つけると、泣いていても泣き止んだり、指導者や友達と一緒に探したり、5歳児に教えてもらった場所で探したりする姿が見られた。

また、ダンゴムシに興味をもったことから、特徴や住む環境を知ったり、お家をつくったりする中で、住みやすいように環境を考え、試してつくったり、ダンゴムシについてさらに調べたりするなど、指導者や友達と一緒にダンゴムシに心を寄せて自分の思いを伝え合いながら世話をする姿が見られた。

## &lt;本活動のねらい&gt;

- ・身近な小動物との出会いを通して、ダンゴムシの動きや様子、食べ物に関心をもつ。
- ・身近な小動物と関わる中で友達と一緒に調べたり話し合ったりして、思いを伝え合う。

## &lt;本活動での教育的意図&gt;

- ・身近な小動物や自然に親しんだり興味をもったりできるようにする。
- ・見たこと、感じたことを友達と言葉で伝え合うことの楽しさや、喜びを感じられるようにする。

子どもと指導者の姿 指-指導者 子-子ども  
 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿

視点 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○虫探しをしていた子どもたちがダンゴムシを見つけた。

A児 「あっ！ダンゴムシ！」

B児 「ここにもいる！」

飼育ケースに入れて、指導者や友達に見せていた。

A児 「先生見て！ダンゴムシ見つけてん」

指 「わあ、すごい！ダンゴムシ見つけたんだね」

A児 「うん！」

指 「どこで見つけたの？」

B児 「植木鉢の下にいたよ」 自然との関わり・生命尊重等

A児 「土のところに隠れてた」

○しかし、次の日、飼育ケースに入れたままにしていたダンゴムシは動かなくなっていた。

A児 「ダンゴムシ死んじゃった。なんで死んでしまったのかな」

指 「本当だ。ダンゴムシ、なんで死んでしまったんだろう」

B児 「暑かったのかな」

A児 「わからん」 自然との関わり・生命尊重等

指 「暑いところは、しんどかったのかな」

B児 「涼しいお家がいいのかな。ダンゴムシさん、ごめんね」  
 指導者とA児とB児でダンゴムシを土に埋め、お花を飾った。

○次の日もダンゴムシ探しをしていた。

A児 「またダンゴムシ見つけたよ」

知 幼児の発見や感動に共感したり、発問したりし、身近な小動物や自然に親しんだり、興味をもったりできるようにする。

徳 ダンゴムシの様子に、共に心を寄せて、命のあることに気付けるようにする。

B 児 「植木鉢の下にいた」

指 「昨日のダンゴムシは暑くてかわいそうだったね。どうしたらいいかな？どんなお家に住んでるのかな？」

A 児 「土のところで見つけたから土かな？暑くないお家に入れてあげないとね」 思考力の芽生え等

B 児 「そーやな。土取りに行こう。大きなタライがいるな」

A・B児 タライをもらい、タライいっぱい土を入れた。

B 児 「これでいいな」

指 「ダンゴムシさん、喜んでるね」

A・B児 タライにダンゴムシをたくさん集めて喜んでいた。  
協同性、自然との関わり・生命尊重等

○その日の午後、クラスで『ぼく、だんごむし』の絵本を読んだ。次の日、ダンゴムシのお家づくりが始まった。

指 「お家に何がいるかな？」

A 児 「食べ物がある」

A 児 「ダンゴムシは葉っぱを食べるから、探しに行こう」

B 児 「石とかコンクリートも食べるからいるで」

言葉による伝え合い等

指 「そうだね。絵本に書いてあったの、よく覚えてるね。お家にいるもの、みんなで探してみよう」

○みんなで探し、タライに枯れ葉や石を入れた。

C 児 「葉っぱ見つけたよ」 言葉による伝え合い等

A 児 「緑は違うで。茶色い葉っぱやで」

指 「絵本にあったみたいなの素敵なお家になってきたね。ダンゴムシさん、喜んでるね」

A 児 「このダンゴムシ、丸くならへん」

B 児 「これは丸くならへんからワラジムシや！」

D 児 「ほんまや。触っても丸くならへんな」

指 「同じ形でも、丸くならないのはワラジムシって言うんだ。Bくん、よく知ってるね」

思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等

C 児 植木鉢を動かしてダンゴムシを探していたが、枯れた葉っぱの下にダンゴムシがたくさんいることに気付く。

C 児 「ここにもおる！」 自然との関わり・生命尊重等

指 「こんなところにもいっぱいダンゴムシさんいるんだね」

A 児 「分かった。だってダンゴムシは枯れた葉っぱ食べるもん」

B 児 「ほんまや」

○子どもたちはダンゴムシを見つけるとタライに入れていた。

そして、タライの土を霧吹きで湿らせていた。それから毎日、ダンゴムシの様子を見ていた。  
思考力の芽生え等

知・徳 前日のことを振り返りながらダンゴムシに心を寄せていけるように投げかける。

知・徳 身近な自然に興味をもてるように、生育環境について一緒に考えたり、小動物の命を思いやりする機会をもち、言葉をかける。

知 継続して身近な小動物、ダンゴムシに興味をもち、親しみを感じたり、クラスで考えたりすることができるように、ダンゴムシの生態に関する絵本を準備する。

知 身近な小動物の特性に興味や関心をもてるように、活動や環境に取り入れたり、子どもの思いに共感したりする。

知 身近な環境に関わりながら、自分たちの生活環境にも興味や関心をもち、主体的に関わろうとするようにする。

知・徳 知っていることや見たこと、子どもの思いを友達と言葉で伝え合うことができたり、喜びが感じられたりするように仲立ちをする。また、互いに知っていることを伝え合い認め合えるようにする。

知 ダンゴムシの住む環境にもいろいろあることに気付いたり、いつもと違う環境にいたことに疑問をもって考えたりし、身近な自然に好奇心や探究心をもって主体的に関われるように見守る。

○『ダンゴムシ体操』をする。  
ダンゴムシになりきって、タイヤの中のダンゴムシがひっくり返ってバタバタする様子を、歌を歌いながら表現していた。  
**健康な心と体、思考力の芽生え等**

**指** 「ダンゴムシさん、ダンゴムシさん、どうしたの？」  
**子** 「もとにもどれないよー」

○その後もダンゴムシ探しは続いていた。クラスで、『ころちゃん はだんごむし』を読んだ。数日後、

**指** 「あれ？この白いダンゴムシ何かな？」  
**E 児** 「何かな？」

**思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等**

**F 児** 「これ皮やで」  
**G 児** 「ああ。皮脱いだからか」  
**指** 「そうか、皮かな。どの子が脱いだんやろうね？」  
**F 児** 「この子」と、一番大きいダンゴムシを指さした。  
**指** 「どうしてこの子ってわかるの？」  
**F 児** 「だってな、皮脱いだら、大きくなるもん。絵本にあった」  
**指** 「そうか。皮を脱いだら大きくなるって書いてたね。きっとこの子がここで皮脱いだのかもかもしれないね」  
**F 児** 「うん！」

○その後もダンゴムシ探しは続いている。

**体** ダンゴムシに興味をもっていることから、自分自身もダンゴムシになりきって遊べる『ダンゴムシ体操』を取り入れ、ダンゴムシにより親しみがもてるようにする。

**知** ダンゴムシになりきっている子どもの姿に共感し、一緒に表現を楽しみながら子どもの動きや楽しんでいる姿等を認める。



**【考察】**

・ダンゴムシに興味をもったことから、子どもの発見や感動に共感しながら、少しずつ子どもがダンゴムシの生態や特徴についても気付くことができるように言葉をかけたり、一緒に探したりした。その後、子どもが好奇心や探究心をもって家づくりをしたり、親しみをもって関わったりするようになった。指導者が答えを示すのではなく、子どもが自ら考え、気付くことができるような言葉をかけ、子どもの思いに寄り添った環境を用意したことが、子どもが自分で試したり考えたりする姿につながった。  
**(協同性、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、言葉による伝え合い等)**

・絵本の知識だけではなく、子どもが実際に見たり、世話をしたりしたことを伝え合うなどの経験が知識と結び付き、その後の生活で、主体的に考えたり活動したり、なりきって体で表現したりといった、意欲的に関わる姿が見られるようになった。

**(思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、言葉による伝え合い等)**

**今後に向けて**

・自然と関わる経験の中で、子どもたちの発見や驚きが喜びや学びとなるように、指導者が思いを聞いたり、友達の思いや考え等に気付かせたりしていくことが必要だと感じる。ダンゴムシと関わる体験から、身近な小動物の生育環境について考えたり、命を思いやったりし、生命あるものを大切にしたい。さらに、ダンゴムシの生態や特徴について興味や関心をもてるように、絵本や図鑑を取り入れたり、ゆっくり観察したりできる環境を整えていきたい。

『ぼく、だんごむし』 作：得田 之久 (福音館書店)  
『ころちゃんはだんごむし』 作：高家 博成・仲川 道子 (童心社)

## でも、お空飛びたいって思ってるよ

～アオムシを育てる中で、親しみを持ち、命の大切さに気付く～

## &lt;これまでの取組&gt;

隣のクラスで飼育していたアオムシがアゲハチョウになった。そのチョウを逃がすとき誘ってもらい一緒に見る事ができた。育てた様子も、隣の組の友達から聞く事ができた。

その後、「チョウチョ、ふわふわって飛んでたなあ」（腕を動かしながら）、「止まるときこうやって止まってたよ」（腕を後ろで組んで）と、体や言葉で見たことを伝えようとする姿が見られた。

また、「このチョウチョ、見たことある！」「チョウチョって、アオムシなんやで」と話をするなど、チョウに興味関心をもつようになってきた。そこで、担任は、アオムシやチョウに関わる絵本等を保育室に準備し、子どもが園庭で見つけたアオムシをクラスで育てることにした。

## &lt;本活動のねらい&gt;

- ・身近な小動物や自然に親しんだり、興味をもったりする。
- ・身近な小動物の世話をする中で、成長や変化に気付く。

## &lt;本活動での教育的意図&gt;

- ・身近な自然に興味や関心をもって関わっていけるようにする。
- ・身近な生き物の世話を体験し、命の大切さに気付くようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども  
 幼児期の終わりまでに育てたい姿

視点 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○子どもがミカンの木にいるアオムシを見つけてきた。

A 児 「葉っぱの所にいたー」「これアゲハになるねん」

指 「ほんと、アオムシやね。よく見つけたね。どこで見つけたの？」

A 児 アオムシを見つけた木まで指導者を導いていく。

自然との関わり・生命尊重等

指 「ミカンの葉っぱのところにいたんやね。あ、こっちの小さいのは、アオムシの赤ちゃんだよ」3～4齢幼虫を示す。

B 児 「え、これ？黒い…、ちっちゃいな…」

A 児 「知ってる！絵本にものってた！」

指 「ほら、こっちにも小さいけど、赤ちゃんいるよ」

B 児 「ほんまや！あ、こっちにもいる。4個もいてるやん！」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、

言葉による伝え合い等

指 「大発見！4匹もいるね」

A 児 「先生、ケースとってくる。お部屋で育てよ！」アオムシをケースに入れ、保育室に持ち帰る。

指 「チョウチョになるといいね」

○翌朝、子どもは登園するとすぐにアオムシの数を数えている。

B 児 「1、2、3、4、4匹おるー」

C 児 「いっぱい食べるなー。葉っぱ小さくなってきてる」

指 「お腹すいてたかな。葉っぱなくなるね。どうしようかな？」

C 児 「この葉っぱが好きやから、取ってきたらいいな」

知 木の名前や生息場所など、子どもの気付きを認め、自然への興味、関心や探究心を引き出す。

知 指導者が、言葉や行動で再確認することで、改めてアオムシの赤ちゃんを認識できるようにする。

知 子どもの興味や関心を捉え、さらに生き物への関心を高めていけるように、3～4齢幼虫について、イメージしやすい言葉で知らせる。

知 子どもの言葉を受け、言い換えることで対象物により数え方が異なることに気付けるようにしていく。

徳 指導者の思いを伝え、成長への期待がもてるようにする。

徳 アオムシにはミカンの葉が必要なことなど、具体的な飼育方法や成長に必要なことに気付かせ、より主体的に飼育活動ができるようにする。

D 児 「この落ちてるのは何やろ？」  
A 児 「アオムシのウンチやで」  
自然との関わり・生命尊重、思考力の芽生え等  
子 「えーっ！！」 子どもたちは驚いている。「黒いな～」  
指 「そうやね、アオムシもウンチするんやね」  
E 児 「なんか、ちょっと臭くない？」  
D 児 「ほんまやー」 みんなで笑い合っている。  
指 「よく食べてるもんね」 言葉による伝え合い等

○葉の交換や掃除等、世話を指導者と続けていたある日のこと  
F 児 「ちょっと、色変わってるー」 アオムシの変態に気付く。  
思考力の芽生え等  
B 児 「どこにおるん？」「ほんまや、いた！」  
C 児 「(本と見比べている) 一緒やー」  
自然との関わり・生命尊重等  
指 「すごいね、毎日見てるから分かるんやね。他にも発見したら、教えてね」  
A・C 児 「アオムシだよー」 友達に伝えにいく。  
G 児 「なあ、前のアオムシおらんねん。逃げたんかな」  
A 児 「いた！」 ケースの中にサナギを見つけ、  
G 児 「え、これ？何か違うみたい」 思考力の芽生え等  
指 「ほんとだ、なんだろうね？」  
A 児 図鑑を持ってきてサナギを指し「これ、これやね」  
G 児 「さーなーぎ やって」  
H 児 「まだ、3匹はアオムシや」  
I 児 「まだチョウチョになれへんのかな？」 思考力の芽生え等

○ある日の朝、チョウが羽化した。登園してチョウを見つけた子どもたちは、喜んで、次々と友達に知らせ始めた。  
B 児 「うわあ！チョウチョになってる！」  
C・F 児 「きれいー！」「やったー」  
指 「ほんとに、きれいだね」  
H 児 「すごいなー。サナギがチョウチョになってるんで」  
G 児 「チョウチョさん、パタパタ飛んでる」  
H 児 「(飼育ケースから) 出たいんかなあ」  
I 児 「ごはん食べたいん違う？」  
自然との関わり・生命尊重、思考力の芽生え等  
J 児 「出してあげよう」  
K 児 「えー！でも、まだ見ときたい」  
J 児 「ごはん食べられへんかったら、かわいそうやん」  
道徳性・規範意識の芽生え等  
指 「チョウは、どう思ってるんやろね…？」  
B 児 「お花入れてあげたらいいやん」  
F 児 「でも、お空飛びたいって思ってるよ」  
指 「そうかもしれないね…」  
G 児 「だってこの中、せまいやんな」

**知** アオムシの糞に対して驚いたり意外性を感じたりしている様子を受け止め、その子どもなりの表現や言葉を引き出す。

**徳** 食べて育つことを言葉で確認しながら、アオムシの成長への関心と愛着をもたせていく。

**徳** 子どもがアオムシを大切に思う気持ちに寄り添い認めることで、命あるものへの思いを深めていく。

**知** 継続した世話だからこそ気付いたこととともに、子どもの主体性を認め、知的好奇心を引き出す。

**知** 子どもが不思議に思う気持ちに寄り添ったり、共感したりしながら、探究心をさらに深める。

**知・徳** 子どもの思いに共感し、喜びを十分に受け止め、チョウへの関心や愛着を高め、観察する力、言葉を引き出す。

<p>K 児 「でも、まだ見ときたいー」観察ケースを抱きしめている。 道徳性・規範意識の芽生え、自然との関わり・生命尊重等</p> <p>指 「どうしようか？」</p> <p>G 児 「かわいそうやん」</p> <p>H 児 「もうちょっと…」見ている。</p> <p>K 児 「(ケースに羽が) 当たってるし…」</p> <p>指 「チョウの羽どうなってるかな？」</p> <p>D 児 「なんか音する…。カサカサって言ってる」</p> <p>指 「このままケースにいたらどうなるかな」</p> <p>G 児 「もっと(チョウ)大きくなったら、絶対狭いと思う」</p> <p>K 児 しばらく考えている。「…じゃあぼくが逃がす！」</p> <p>C 児 「私もしたい！」 自立心、道徳性・規範意識の芽生え等</p> <p>○指導者が子どもの思いを整理し、保育室にチョウを放すことにする。保育室の窓を開け放ち、ケースの蓋を開ける。子どもたちが固唾を飲んでチョウの動きを見守る中、チョウはケースから少しずつ出てきて、そして、保育室の中を飛び回った。</p> <p>子 「あかんー、そっちはロッカーやでー」「外はこっちー」 チョウに声援を送り、外へと一生懸命に誘導する。</p> <p>○チョウは窓から出て行った。付近を歩きつ戻りつして、空高く飛んでいった。</p> <p>子 「チョウチョさんバイバイ」 道徳性・規範意識の芽生え等</p> <p>「遊びにきてねー」「みんなにバイバイしてる」</p> <p>指 「ほんとだね。さよならって言ってるのかもしれないね」</p> <p>○その後、アゲハチョウが飛んで来る度に「チョウチョさんが、戻ってきた」と、思いを寄せている。 自然との関わり・生命尊重等</p>	<p>徳 子どもの思いを十分に聞きながら、活動の方向性を示す指導者の発問のタイミングを図る。</p> <p>徳 チョウの立場になって考えられるような言葉をかけ、子どもの気持ちを揺さぶる。チョウの生態を踏まえ、<u>チョウの命を守るために必要なことに気付けるようにする。</u></p> <p>徳 先日、保育室で逃がし、チョウの動きに注目したことが、<u>感動する心につながった。</u>出口を探すように飛びチョウの様子に注目させ、<u>チョウの気持ちを思いやれるようにする。</u></p> <p>徳 子どもの気持ちに寄り添いながら、チョウの思いを代弁することで、<u>より、チョウを大切に感じる気持ちが高まるようにする。</u></p>
--	---

**【考察】**

- 子どもたちが自分で興味のあることをすぐに調べたり、友達と発見の喜びを共有したりできる環境構成の工夫は、子どもの探究心の向上や伝え合う楽しさを味わうための支えになる。  
(思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、言葉による伝え合い等)
- チョウの飼育を通して子どもたちの経験を広げることができた。指導者は子どもの興味や関心を知り、つぶやきに耳を傾け、その言葉の中にある思いを察したり、気付きを引き出ししたりしていくことが大切である。それが、子どもたちがアオムシに主体的に関わり、継続した世話や観察することにつながり、チョウの羽化まで見たことは「生命」を感じる感動経験となった。  
(道徳性・規範意識の芽生え、自然との関わり・生命尊重、言葉による伝え合い等)

**今後に向けて**

- 羽化したチョウを飼育ケースに留めておきたい子どもの気持ちを指導者は受け止めながらも、子ども自らチョウを外へ放つことへと導いた。今後は、この経験を生かしながら、命あるものに対して、どのように関わっていくかなど、子どもたちが考えられるような活動や環境を工夫していきたい。

やったあ つながった!!

～泥だんごづくりを通して、友達と一緒に目的をもって遊ぶ～

<これまでの取組>

6月に入り、2歳児から5歳児の子どもたちが、所庭で一緒に泥んこ遊びを楽しむ中で、気の合う友達と全身を使って水・砂・泥の感触を楽しむ姿がいろいろな場面で見られた。

指導者が仲立ちとなることで、子どもたちが意見を出し合い、砂山を作り、トンネルを掘って貫通させる、泥の大きなケーキをつくるなど、クラスや年齢を越えて誘い合い、数人で関わって遊ぶ場面が増え始めている。

前回、5歳児が泥だんごを並べて置いていき、とても長い「だんごの道」をつくっていたことに、興味をもって見ていた。

<本活動のねらい>

・泥だんごづくりを通して、友達と関わる中で、「みんなでできた」という喜びを感じる。

<本活動での教育的意図>

・友達と一緒に泥だんごを完成させた達成感や喜びに共感することで、友達とのつながりを広げ、友達と関わる楽しさに気付くようにする。

子どもと指導者の姿 指-指導者 子-子ども

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点子どもに育てたいこと

教育的意図をもった働きかけ

○泥だんごづくりに関心をもち、進んで取り組めるように、いくつかの泥だんごを並べておく。

A 児 泥だんごが並んでいるのに気付き、泥だんごをつくり始める。

指 「ひまわり組さん(5歳児)のおだんご、すごかったよね! みんなでおだんごつくろうか?」

A 児 「うん、やるやる!」

B 児 「やりたい!」

思考力の芽生え等

C 児 「ぼく、うまいことつくられへん」

指 「Cくん、先生と一緒にやってみる?」

A 児 「だんごいっぱいつくらなあかんやん」

B 児 「そんないっぱいできるかな」

C 児 みんなの話の聞いている。

協同性、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「みんなでやったらできるよ」

5歳児 「一緒にやったらわ」

5歳児 「みんなあ、一緒にやっであげよう」

協同性、社会生活との関わり等

徳 子ども自身のやりたくなる気持ちを待つ。

知 砂や泥を湿らせ、泥だんごが作りやすい砂や泥に気付くように環境を工夫する。

徳 5歳児が取り組んでいたことを思い出し、自分たちもやってみようと思えるよう声をかける。

徳 「みんなでやったらできる」と励まし、友達の存在に気付かせ、力を合わせて遊ぶ楽しさにつなげる。

○5歳児も活動に加わる。

指 「ひまわり組さんが来てくれて嬉しいわ」

D 児 「どこでおだんごをつくる？」

E 児 「このへん やりやすいで」

D 児 「一緒にやろう。みんなおいで～」

協同性、自然との関わり・生命尊重等

指 子どもたちと一緒に泥だんごをつくり、並べていく。

A 児 友達の様子を見て、泥だんごをつくり始める。

A 児 「こんなんでもいい？」

指 「うわあ、Aちゃんすごい！素敵なだんごができたね。どこに置く？」

A 児 笑顔でできあがった泥だんごを列に置きに行く。

指 「だんだん長くなってきたね。これからどうする？」



F 児 「道にしよう。家までつなげよう」

G 児 「え～ めっちゃ長いやん」

H 児 「みんな、もっとつくって！」

協同性、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「Fちゃんたち、家までつなげるんだって。みんなでやったらきっとできるよね」

子 それぞれが泥だんごをつくるスピードを速め、次々につくっては並べていく。

指 「家までつながるかな？みんなで作ったらできると思うよ」

5歳児 いろいろな形のだんごをつくっている。

4歳児 その様子を見てつくり始める。

B 児 「先生見て見て、ハートの形」

B 児 「先生こっち来て、雪だるまの形」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

子 次々と泥だんごの形を何らかの形に見立て始める。その発見を友達へ伝え、歓声をあげている。

B 児 「〇〇ちゃんの形、かわいい！私もつくってみる！」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、豊かな感性と表現等

指 「わあーほんと、いろんな形ができたね」

徳 5歳児の姿に憧れをもち、目標を共有して遊べるように励ます。

徳 指導者も子どもと同じ目線で泥だんごをつくって並べていき、楽しさや期待感を共有する。

徳 「できたね」「おもしろい形」等一人ひとりの工夫を認め、やってみようという気持ちを大切にする。

知 試行錯誤しながら、遊びが継続され、盛り上がるために、この後どのように発展させていくか、子どもたちに問いかけ、一緒に考える。

徳 遊びが広がるように、一人ひとりの考えや発見を他児に伝える。

知・徳 みんなの力で長くなってきたことを認め、遊びを通して友達と関わることの楽しさを味わわせる。

知 子どもの発見、表現に耳を傾け、共感する。

徳 具体的に言葉にして認め、友達と共感できるきっかけをつくる。

指 「もうちょっとで家まで届きそう」

H 児 「あっち（ゴールとなる家のほう）から置いて行くわ」

協同性、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等

指 「それはいい考えやね！」



H 児 「だれかあ、こっち持ってきて！」

F 児 「よっしゃ、持っていくわ！」

G 児 「お皿に入れて一緒に運ぼう！」

協同性、言葉による伝え合い等

指 「やった！みんなでやったらできた」

子 みんなで喜び合っている。

I 児 「みんな、踏んだらあかんで」

J 児 「ここに並んでみよう」

子 泥だんごの道に沿ってみんなで並び始める。

協同性、思考力の芽生え等

指 「すごいね。長くなったね。みんなでいっぱいつくったね」  
できあがった物をそのまましばらく置いておく。

徳 目標（ゴール）があとどれくらいなのか子どもたちなりに感じ、認識できるように声をかけ、子どもたちが自ら工夫したり、協力したりする姿を見守る。

徳 みんなで協力したことで、できあがったことを言葉にして認め、子どもたちとともに喜ぶ。

徳 友達と協力してつくった物を見ることで、もっと友達と関わる喜びや充実感や達成感を味わえるようにする。

### 【考察】

・周囲の子どもたちに、友達が泥だんごをつくったり、並べたりすることを楽しむ様子に気付かせたり、指導者が一緒にやって見せたりしながら、さりげなく遊びに誘いかけたり、やり始めたときを見逃さず、すぐに声をかけることが、もっとやってみようという気持ちにつながった。指導者の一人ひとりに対する共感が、他児への発信となり、友達の様子に目を向けるきっかけとなっている。そのことが自分もやりたいという思いとなり、さらに遊びが発展し、子ども同士で共感し合うなど、つながりが広がったと思われる  
(協同性、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等)

・つくった泥だんごを並べて泥だんごの道を長くしていくと、できていく過程がはっきり見えるので、「たくさんつくった」「たくさん泥だんごを並べたら長くなった」という思いをみんなで共有できたと思われる。

### 今後に向けて

・このような遊びを通し、友達と一緒に活動することの楽しさや心地よさを味わい、お互いに認め合える関係づくりや、数えたり計ったりすることにも関心をもてるように、だんごを並べた道の長さや、だんごの数量にも気付かせていきたい。

楽しい！魚になったよ

～友達と一緒に存分にプール遊びを楽しむ～

<これまでの取組>

泥んこ遊び、色水遊び、プール遊び等夏季ならではの遊びを楽しむ中で、泥や水の感触を味わっている。プール遊びを始めた頃には、顔に水がかかるとに抵抗がある子どももいたが、プールでのいろいろな遊びを通し、経験を重ねるごとに少しずつ水に慣れ、プール遊びの楽しさを知り、存分に体を動かし、楽しめるようになってきた。また、プール遊びでの約束やきまりをみんなで守って活動しようとする姿も見られるようになってきた。

<本活動のねらい>

- ・水に慣れ親しみ、友達と一緒にプール遊びの楽しさを味わう。
- ・プール遊びの約束やきまりを守って、安全にプール遊びを楽しむ。

<本活動での教育的意図>

- ・存分に水の感触を味わいながら、プール遊びを楽しめるようにする。
- ・きまりを守って安全に、いろいろな遊びを楽しめるようにする。

子どもと指導者の姿 **指**-指導者 **子**-子ども  
幼児期の終わりまでに育てほしい姿

**視点** 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○水着に着替え準備体操をする。

**指** 「さあ、元気いっぱい体操しようね」

**A 児** 「そうやで、体操ちゃんしないと足が痛なるって、僕のお兄ちゃんが言ってたで」 健康な心と体等

**指** 「そうだね、よく知ってるね。大切なこと教えてくれてありがとう」

**子** シャワーをしてプールに入る。

**指** 「さあ、いつものように足からゆっくり入りましょう」

**子** 足→腰→腹→胸→肩の順番でゆっくり入水する。

**B 児** 「先生、今日はプールの水ぬくいなあ」

**C 児** 「お湯みたいやなあ」

**B 児** 「シャワーの水は、冷たかったのになあ」  
思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等

**指** 「本当だね、何でかな？」

**B 児** 「お日さま、いっぱい出てるからなあ」

**C 児** 「お日さまは、すごいなあ」  
思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等

**指** 「お日さまのおかげで気持ちいいね、今日はいっぱい遊べそうだね。さあ、今日は何して遊ぼうかな？」

**体** 子どもの経験や身近な人からの話等身に付いていることを認め、自ら安全に活動することを意識できるようにする。

**知** 子どもの発見を受け止め、共感し、水温の変化の不思議さについて考えていけるようにし、水の不思議さに興味をもてるようにする。

**徳** 子どもの思いに共感し、プール遊びに期待をもてるようにする。

C 児 「魚とり！やりたい！」

D 児 『洗濯機』がいい！」

健康な心と体等

E 児 「フープくぐりがやりたい！」

○その後、子どもたちが遊びの順番を決める。

指 「それでは、はじめに魚とりの準備からしようね」

子 2グループに分かれ、水の中にもぐったり、手で探したりしながら、プールの底にある魚や貝の形をしたものを見つけて、とっていく。

健康な心と体等

C 児 「先生、(魚が)とれた！」

指 「Cちゃん、魚とるのが上手だね」

D 児 「2つとれたよ」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「Dちゃん、今もぐってとってたね」

D 児 「うん」

嬉しそうに遊びを続けている。

G 児 「先生、見てえ(とれたよ)」

自立心等

指 「うわあ！Gちゃんもとれたの、すごいね。今日は顔つけてとれたね」

G 児 「うん」

とても嬉しそうにうなずく。

指 プールの底の魚がなくなり、とった魚の数を子どもに聞く。

子 それぞれ数えたり友達と見せ合ったりする。

子 「明日もやりたい」

指 「楽しかったね、またしようね。次は『洗濯機』に変身するよ。『洗濯機』するときにはどんなことに気を付けるのかな？」

D 児 「みんなで同じ方に回らなあかんねん」

G 児 「違う方に回ったら、ぶつかってこけるねん」

指 「そうだったね」

C 児 「押したら危ないねんで」

健康な心と体等

D 児 「こけて怪我するで！」

指 「本当だね、気をつけようね」

D 児 「みんなで一緒に力合わせな、早く流れへんで」

協同性、思考力の芽生え等

指 「力合わせるって？」

D 児 「みんなが速く回るねん。そしたら、水も速く回るねん」

C 児 「速く流れたら、止まったときでもぼくら流れていくねん」

指 「そうだね、みんな大好きやもんね」

「じゃあ、みんなで約束守って『洗濯機』しようね。

みんなでやるよ。先生も一緒に頑張るね」

「スイッチ、オン！」

子 プールの中を渦ができるように声をかけながら、

体好きなことを存分に楽しみ、子どもたちが思いを出せるよう投げかけ、子どもたちの遊びの進め方を見守る。

体積極的にもぐって遊びを楽しめるように海をイメージした教材を用意する。

体魚とりの経験を通して、自然に水に慣れ親しめるようにする。

知どれだけ魚をとったかを投げかけ、数量に関心をもてるように、次への意欲につなげていく。



体自分たちの遊んだ経験から予測し、安全に遊ぶための約束を意識できるようにする。

体存分に遊びを楽しみたいという気持ちが高まるように、楽しさを引き出し、みんなで共感できるようにする。

<p>みんなで 走る。</p> <p><b>指・子</b> 「洗濯機、洗濯機、・・・・」</p> <p><b>B 児</b> 「足、うまく上がれへん、水重たいわ」</p> <p><b>D 児</b> 「足にいっぱい、力がいるわ」</p> <p style="text-align: center;"><b>自然との関わり・生命尊重、思考力の芽生え等</b></p> <p><b>指</b> 「本当だね」</p> <p><b>子</b> しばらくみんなでプールの中で走る。</p> <p><b>指</b> 「5、4、3、2、1、0」</p> <p><b>子</b> 全員走るのをやめ、水の流れに身をまかせて浮くことを楽しむ。</p> <p><b>D 児</b> 「わっー！浮いてる！」</p> <p><b>G 児</b> 「うわっー！水と一緒に流れてる～」</p> <p><b>I 児</b> 「気持ちいい」</p> <p><b>J 児</b> 「楽しい、魚になったよお」</p> <p style="text-align: center;"><b>健康な心と体、豊かな感性と表現等</b></p> <p><b>指</b> 「ほんと！魚みたい！」</p> <p><b>子</b> 『洗濯機』を数回繰り返し、楽しむ。 「またやりたい」「明日もやりたい！」</p> <p>○後日フープをくぐったり、浮き輪で浮いたりしながら、子どもたちからいろいろな遊びを考えたり提案したりして遊んだ。</p>	<p><b>体</b> リズミカルに動くことを楽しめるように声をかける。</p> <p><b>知</b> 全員が分かる数を遊びに取り入れ、関心がもてるようにする。</p>  <p><b>知</b> 水の流れや気持ちよさが十分に感じられるように、繰り返し遊び、子どもたちの気持ちを言葉にして引き出していく。</p> <p><b>知</b> それぞれの子どもの思いや表情、しぐさ等に共感し、さらに思いを出して遊べるようにする。</p>
<p><b>【考察】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちは、『魚とり』『洗濯機』等の遊びを通して、水に慣れ親しみ、水の冷たさを感じ、気持ちよさを味わい、全身を使って遊ぶことを楽しむことができた。遊びを繰り返し楽しませることで、子どもたちの挑戦する意欲が高まり、水遊びの気持ちよさや楽しさが味わえると考えられる。また、指導者が子どもの気持ちに共感し、遊びを共に進めていくことが必要である。 (健康な心と体、協同性、思考力の芽生え等)</li> <li>プール遊びを安全に楽しむためには、約束やきまりを子どもたちに伝えたり、経験や予測から一緒に考えたり、必要に応じて再確認したりする中で、子どもたちがそれらを守ることの必要性を感じ、安全を意識して遊ぶことが大切である。 (健康な心と体、言葉による伝え合い等)</li> </ul> <p><b>今後に向けて</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>今後のプール遊びにおいて、より水に親しむ、楽しさを味わうなど、さらに主体的に遊べるように、指導者や友達と『魚とり』や『洗濯機』等の遊びのイメージを子どもとともに膨らませ、共有して遊んでいきたい。また、水に親しみながら、体を動かして遊ぶ楽しさを味わった経験から、いろいろな運動遊びの中でも体を存分に動かして遊ぶ楽しさを感じ、意欲的に運動遊びに取り組みたい。</li> </ul>	

コップ足りないよ

～当番活動を通して数量の興味・関心を広げる～

<これまでの取組>

5月より、グループ活動として当番活動に取り組んできた。1週間交代でいろいろな当番活動を経験する中で、給食当番はコップ等をクラス全員に配る役割となっている。数の認識は個人差があり、個々の配り方も違うので、初めは一つずつ配るため時間がかかってしまったり、最後にコップが足りなくなったりしていたが、段々と経験を重ねるうちに、「なぜ足りなくなったのか?」「どうしたら効率よく配れるのか?」などグループで話し合う姿も見られ、仲間意識も芽生え始めた。

普段から、朝の出席確認をするときに、欠席の子どもを気にする中で、欠席児を数えたり、クラスの人数を数えたりして、「昨日よりもお休みの友達が少ない」などと気付き、数にも関心がもてるようになってきた。また、たくさん野菜や実を収穫した後で数えるなど、機会を捉えて数えたり比べたりし、多少や大小などにも気付けるようになってきた。

<本活動のねらい>

- ・生活や遊びの中で、数を数えたり、1対1で対応させたりなど数に興味をもつ。
- ・グループ活動を通して友達と協力し、一緒に活動する楽しさを味わう。

<本活動での教育的意図>

- ・生活や遊びの中で数の多少に気付いたり、比べたりする経験を取り入れることで、数への興味や関心がもてるようにする。
- ・友達と積極的に関わりながら、相談したり協力したりすることで、一緒に活動する楽しさを味わえるようにする。

子どもと指導者の姿 指-指導者 子-子ども  
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○給食時、グループメンバーと一緒に給食を食べるので、各グループが机を寄せて給食準備をし、給食当番はコップを配り始める。

- A 児 「私、カブトグループに配ろう」
- B 児 「じゃあぼくはバッタグループ」
- C 児 「ぼくもバッタグループ。Bくん一緒に配っていい?」
- B 児 「いいよ。じゃあ一緒にしよう」

協同性、言葉による伝え合い等

- 指 子どもがどのように役割を分担するのか見守っている。
- B・C 児 言い合いを始める。
- 指 「あら?どうしたの?」

知 遊びや生活の中で、数を数えたり、物に対応したりする経験ができるよう意識したり、活動を工夫したりする。

体 子どもたちが自分たちで生活や遊

<p><b>B 児</b> 「Cくんずるいで！ぼくが、初め、配るって言ったのに」</p>	<p>びを進めていけるよう見守り、トラブルや対処が必要な時にタイミングよく助言できるようにする。</p>
<p><b>C 児</b> 「だって・・・一緒にやっついていって、Bくん言ったやん」</p>	
<p><b>指</b> 「そうだね。BくんはCくんのどこがずるいって思ったの？」</p>	
<p><b>B 児</b> 「だってな、Cくんバツタグループのコップ、4つも持ってるやん。そしたら、ぼくは2つしか配れないやん」</p>	
<p><u>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等</u></p>	
<p><b>C 児</b> 「いいやん別に・・・」</p>	
<p><b>B 児</b> 「あかん！Cくん4つ、ぼくが2つ、ぼくが少ないやん」</p>	
<p><b>指</b> 「そうか。Bくんは一緒に配るってことは、どうすることだと思ってたの？」</p>	<p><b>知</b> 疑問や困ったことを自分なりの言葉で伝えられるようにすることで、一人ひとりの思いを受け止められるようにする。</p>
<p><b>B 児</b> 「ぼくはな、半分ずつ配ることやと思ってた」</p>	
<p><b>指</b> 「Cくんはどう思った？」</p>	
<p><b>C 児</b> 「ぼくはな・・・そんなん思っていない・・・わからん」</p>	
<p><b>指</b> 「そうだね。始めにどうするのか決めてたらよかったね。じゃあどうする？もう一度考えてみる？」</p>	<p><b>知</b> 相手の話をじっくり聞くことで、言葉で伝え合うことの大切さや伝わることの喜びが感じられるようにする。</p>
<p><b>B 児</b> 「Cくんどうする？半分ずつでもいい？」</p>	
<p><u>協同性、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等、</u></p>	
<p><u>言葉による伝え合い等</u></p>	<p><b>徳</b> お互いの気持ちに折り合いがつけられるよう指導者が仲立ちをする。</p>
<p><b>C 児</b> 「うん・・・いいよ。」</p>	
<p><b>B・C児</b> 6人分のコップを二人で丁寧に分けてから配りに行く</p>	
<p><u>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等</u></p>	
<p><b>A 児</b> カブトグループに配りに行き、困った表情で何かつぶやいている。</p>	
<p><b>指</b> 「Aちゃんどうしたの？」</p>	<p><b>知</b> 疑問や困ったことを自分なりの言葉で伝えられるよう見守り、タイミングよく言葉をかける。</p>
<p><b>A 児</b> 「私な、6人分配ろうと思って、コップ持っていったけど、1個足りなくて、もう一回取りにきたら、もうコップないねん」</p>	
<p><u>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等</u></p>	
<p><b>指</b> 「コップもうないね。どうしたのかな？」</p>	<p><b>徳</b> 困ったことを一人の問題とせず、全体に投げかけることで、相手の気持ちに気付くことができるようにする。</p>
<p>「ねえ、みんな！Aちゃんがコップ1個足りないって、探しているんだけど、どこかに1個余っていないかな？」</p>	
<p><b>子</b> 自分のコップや周りに置いてあるコップを見回している。</p>	<p><b>知</b> 何がいくつ足りないのか？を具体的に伝えることで、数と人との対応につながるようにする。</p>
<p><u>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等</u></p>	
<p><b>D 児</b> 「先生！Eくんのところにコップ置いてある。Eくん林みやのに」</p>	<p><b>知</b> 数量の比較や増減など、具体的に伝えることで、数量への興味・関心がもてるよう工夫する。</p>
<p><b>指</b> 「ほんと？よかった。じゃあDくん、それを持ってきてちょうだい。Aちゃん、コップ1個余ってるってDくんが教えてくれたよ」</p>	
<p><b>A 児</b> 「よかったあ。1個だけなかってん。これでカブトグループ終了や」とコップを配り終え、ほっとした表情で席に着く。</p>	
<p><u>自立心等</u></p>	

指 「お当番さんご苦労様でした。Dくん、よく気が付いてくれたね。ありがとう。ではいただきます」

子 「はい。いただきます」

徳 係や当番活動などを通して人の役に立つことを嬉しく感じられるように、主体的に取り組む姿を認めていく。

### 【考察】

・数量や図形、空間認識などは個人差があり、興味がある子どもは、自分からどんどん広げていくことができるが、あまり興味をもてない子どもにとっては、生活や遊びの中に取り入れていくことで、自然に学びにつながっていくものと思われる。その時に、「足りない」という感覚を確かなものにするために、「何が足りないのか?」「いくつ足りないのか?」を投げかけることで、数と人と対応させることにつながっていくと考える。そして、今回のような当番活動では、毎日の繰り返しの中で自然に数に興味をもつようになってくると思われるが、その都度、指導者の適切な働きかけにより、「わからない」「むずかしい」ことが、機会を捉えた助言や話し合いで、「分かった」「できた」「楽しい」と感じながら少しずつ認識できるような手立てが大切である。

(自立心、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、思考力の芽生え等)

・4歳児頃よりグループでの活動や係、当番活動等を取り入れていくことで、友達とぶつかったり意見を言い合ったりしながら、相手に対する気付きや思いやり、人の役に立つ役割の喜びを感じられるようになってくる。一人では難しいことも、友達と力を合わせることでできることもあり、できた喜びをみんなで味わえるようになってくると考える。

(協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり等)

### 今後に向けて

・数量だけではなく、文字や空間認識等、今後は生活や遊びの中で意識しながら、自然に興味を芽生え学びにつながるように工夫する必要があると考える。その際、子どもが自ら関わり、「おもしろい」「やってみよう」と思える主体的な学びの芽を育ていけるようにしていきたい。また、今後はグループ活動からクラス全体の活動へと広げていき、大きな集団をみんなで作っていくために力を合わせる活動を経験することから学んでいけるようにと考える。



## かぜバイ菌をやっつけろ！

～『咳エチケット』・手洗いの大切さを知る～

## ＜これまでの取組＞

健康な生活リズムが身に付くように、早寝、早起き、朝ごはんの大切さ、かぜ様疾患などの病気の予防のために丁寧な手洗い、うがいを行えるよう、日々保育の中で取り組んできている。

子どもたちは、自分で手洗い、うがいをするようになってきているが、寒くなってくると、手洗いを簡単にすませるようになってきた。また、インフルエンザの発症が見られ、咳をする子どもたちが数人見られるようになってきた。

## ＜本活動のねらい＞

- ・咳によってバイ菌が広がる様子を具体的に知り、正しい『咳エチケット』の方法を身に付ける。
- ・手洗いの必要性を理解し、丁寧に手洗いをする。

## ＜本活動での教育的意図＞

- ・『咳エチケット』や丁寧な手洗い・うがいは、健康に過ごすために大切であることに気付かせる。

子どもと指導者の姿 指-指導者 子-子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点 子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
<p>○落ち着いた雰囲気をつくり、指導者が子どもたち一人ひとりの様子を見ながら話しかける。</p> <p>指 「寒くなってきたね。かぜをひいている人はいませんか？」</p> <p>A 児 「このまえ、熱出たわぁ」</p> <p>B 児 「ぼくも出た」</p> <p>C 児 「かぜひいたら外行けないなぁ」</p> <p>A 児 「遊ばれへんから嫌やなぁ」</p> <p style="text-align: center;">健康な心と体、言葉による伝え合い等</p> <p>指 「そうだね。外でたくさん遊べないね」</p> <p>指 「かぜをひいて咳がコンコン出たら、どうなるかな？」</p> <p>D 児 「しんどい」</p> <p>指 「咳がコンコンってなったら、口から何かが飛んでこないかな？」</p> <p>A 児 「つばが飛ぶ」</p> <p>指 「そうだね、咳がコンコン出たら、どうしたらいいかな？」</p> <p>D 児 「マスクしたらいいな」</p> <p>E 児 「マスクしたら、飛ばないし」</p> <p>F 児 「手で、口押さえてもいい」</p> <p>B 児 「手にバイ菌付くよ」</p> <p style="text-align: right;">思考力の芽生え等</p>	<p>体 自分の体に関心をもてるように語りかけ、自分の体験を振り返ることができるように導く。</p> <p>体 子どもたちとかぜ様疾患になった経験に共感する。 咳の中にはバイ菌があることに気付かせ、どのようにしたら広がらないのかを考えられるように、咳が出たときはどうなるか発問する。</p> <p>体 咳が出たらどうしたらいいのか、咳の中にはバイ菌があることに気付かせ、どのようにしたら広がらないのか考えられるように導く。</p>

指 「Bちゃん、いいことに気が付いたね。バイ菌ってどこにいるのかな？」

B 児 「つば。つばが付いたから、バイ菌が付くねん」

指 「よく知っているね。じゃあ、咳がコンコンって出たとき、マスクしてなかったら、咳の中のかぜバイ菌はどこまで飛んでいくかなあ。ちょっとやってみようか？」

○子どもが咳をしている絵の口の部分から、バイ菌（つば）がどこまで飛んでいくかを白いテープを伸ばして示す。

C 児 「わあ すごい」

D 児 「そんなに、飛ぶの？」

E 児 「バイ菌、いっぱい飛ぶな」 健康な心と体等

○咳の中に、かぜバイ菌が含まれていること、かぜバイ菌が遠くまで飛んでいくことを知らせ、自分が咳をしたときにはどのようにしたらよいか、考えてさせていく。

指 「手に付いたバイ菌は、その後どうなるかな？」

○口を手で押さえたとき、手にかぜバイ菌が付く様子を、紙でつくった大きな手にバイ菌の絵を付けて見せる。

○その手でいろいろなところを触り、バイ菌が次々と部屋中に広がっていく様子を子どもたちに見せ、目に見えないバイ菌の広がりを知らせる。

C 児 「わあ、いっぱいある」

D 児 「すごいな」

E 児 「手の他にもいろいろなところに付いてる」

F 児 「部屋に広がってる」 健康な心と体等

子どもたちは、口々に驚きの声をあげる。

指 「咳をするときは、かぜバイ菌が飛ばないように、そして、手に付かないようにする『咳エチケット』があります。見てね」

○腕で口を覆う方法を見せ、バイ菌が腕だけに留まっていることを知らせる。

指 「みんなで、やってみよう！」

子どもたちは、全員で指導者の真似をして腕で口を覆う。

指 「かぜバイ菌の付いた手は、そのままいいかな？」

A 児 「手を洗わないとだめだよ」

D 児 「石鹸付けて、洗わないと取れないわ」

C 児 「消毒もしたらいいかな？」

B 児 自分の手をまじまじと見る。

「手を洗わないと、(バイ菌が) いっぱいや」

D 児 「バイ菌いっぱい、手に付いてる～」

F 児 「バイ菌、見えないからわからなかったな」

健康な心と体、思考力の芽生え等

咳をするとかぜバイ菌が飛ぶことに気付くようにする。

知・体 視覚的教材を使って分かりやすく見せながら、かぜバイ菌が遠くまで飛ぶことに気付けるようにする。



体 保健教材を使って、かぜバイ菌は、子どもが思っているより、遠くまで広がることを知らせ、かぜバイ菌に対する新しい知識や発見に導く。

知・体 『咳エチケット』の必要性を感じ取らせ、予防に対する知識の獲得ができるようにする。

徳・体 手の大型絵を出し、指先、指の間等、汚れの残りやすい部分に、バイ菌を貼り付け、目で見て汚れが分かるようにし、自分の体に関心がもてるようにする。

<p>指 「見えないから、気が付かないね。丁寧に洗わないと、 バイ菌が残ってしまうね」</p>	<p><b>体</b> 洗い残しがないように、手の各部分を意識しながら、手洗いができるようにし、手洗いの大切さを知らせる。指導者の手の動きがよく見えるようにし、子どもと一緒に歌いながら手洗いの動きをし、丁寧にすることの意味を理解できるようにする。</p>
<p>指 「みんなで手洗い歌を歌いながら、一緒に丁寧に手洗いをしましょう！」</p>	
<p>子 全員で『手洗い歌』を歌いながら、その場で、手洗いの動きをする。</p>	<p><b>知・体</b> 食事や睡眠をしっかりとること等、紙芝居の内容の話からかぜ様疾患の予防に自ら気を付けられるようにする。</p>
<p>指 「じゃあ、みんなにこのお話をしようかな？」 『コンちゃんのかぜようじん』の紙芝居を見せる。 見た後で、子どもたちから、お話について聞く。</p>	
<p>C 児 「手を洗わないと、かぜをひくな〜」</p>	<p>健康な心と体、言葉による伝え合い等</p>
<p>B 児 「コンちゃんは、好き嫌いなしで、何でも食べていたよ」</p>	
<p>D 児 「咳したら、マスクする」</p>	<p><b>知・体</b> 食事や睡眠をしっかりとること等、紙芝居の内容の話からかぜ様疾患の予防に自ら気を付けられるようにする。</p>
<p>A 児 「マスクなかったら、腕に口付ける」</p>	
<p>C 児 「かぜひいたら、外で遊べないし」</p>	
<p>指 「マスクを付けたり、咳エチケットも大切だね」</p>	
<p>指 「かぜをひかず、毎日、みんなと元気に遊ぼうね」</p>	

**【考察】**

- ・インフルエンザの流行期で咳をする子どもがいたので、子どもたちは保健指導の教材に興味をもち、クラスで考え合いながら話を聞くことができた。目に見えないバイ菌に見える形で表すことで、かぜバイ菌がどこまで広がるのか、手のどこの部分にバイ菌が付しやすいのかなど、4歳児の子どもにも理解しやすいと考え、視覚教材を工夫した。大型絵本や手洗い歌を活用したことで、『咳エチケット』やマスクの使用、丁寧な手洗いが必要であることも、子どもたちに分かりやすく伝えることができた。  
(健康な心と体、言葉による伝え合い等)

- ・手洗い、うがい等の生活習慣は、繰り返し行い積み重ねることが大切である。自分から必要性を感じ、一人ひとりがしっかり行うことが、集団での生活の約束やままりを守ることにもつながってくる。また、健康な体づくりは、就学前施設だけでなく、家庭とも連携しながら取り組み、保護者にも関心をもってもらうように工夫することが必要である。  
(健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え等)

**今後に向けて**

- ・咳やバイ菌の広がる様子を見た後に『コンちゃんのかぜようじん』の紙芝居を見せたことで、かぜ様疾患にかからないためには、手洗いをしたりマスクを着けたりすることの他にも、食事や睡眠をしっかりとること等、大切なことがたくさんあることに子ども自身が気付いた。この気づきを今後、健康に過ごすための活動につなげていきたい。

紙芝居 『コンちゃんのかぜようじん』 作・画：大久保宏昭 (医事監修 愛育病児科医長 若江恵利子) 教育画劇



もう1回 レンガのお家に行こう！

～友達と思いを出し合いながら、言葉のやり取りを楽しむ～

<これまでの取組>

『3びきのこぶた』の絵本を楽しみ、イメージを広げて、指導者と役になりきって一緒に表現しながら楽しい活動を積み重ねてきた。

友達と一緒にイメージを広げながら言葉で自分の思いを伝え、積み木を組み合わせ、試行錯誤しながら『3びきのこぶた』のレンガの家づくりに夢中になって遊んでいる。

<本活動のねらい>

- ・友達や指導者と一緒に絵本の世界を楽しみイメージを広げて、役になりきって言葉を交わしながら『3びきのこぶた』のごっこ遊びを楽しむ。
- ・レンガの家づくりを通して、友達と思いを出し合い、積み木を使って組み合わせたりして遊ぶことを楽しむ。

<本活動での教育的意図>

- ・絵本や物語の世界を楽しみイメージを広げて遊べるようにする。
- ・見立てのおもしろさ、役になりきってやり取りする楽しさを味わえるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども  
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○子どもたちが園庭で積み木を並べて遊んでいた。

指 「何してるの？」

A 児 「レンガのお家をつくっているの！」

言葉による伝え合い等

指 「強そうな素敵なお家だねえ。お友達と一緒に考えたの？」

A 児 「うん！」

指 「お友達と考えた丈夫なお家は、オオカミが来ても吹き飛ばされないね」

A 児 「うん！」 B児と積み木を運んでいる。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「レンガのお家ができたら、教えてね」

B 児 「先生、一緒にオオカミしよう！」

指 「いいよ！一緒にオオカミしよう！おいしそうな子ブタはどこかな？」

知 問いかけることで、子どもの思いを引き出し、イメージがさらに膨らむようにする。

徳 友達と一緒に活動する楽しさを味わえるように友達との関係づくりを支える。

知 レンガの家づくりを通して、遊びの中で積み木の形、大きさ、重さ、長さなどの違いに気付けるようにする。

徳 友達と一緒に知恵を出し合い、考えたことが自信につながるようにする。

○子どもたちが喜んで参加してきた。 言葉による伝え合い等

指 「(B児に向かって) オオカミ、レンガのお家ができた  
ら、子ブタの所へ行ってみないかい？」

B 児 「うん！」

指 「早く、子ブタを食べたいなあ」

C 児 「これ(積み木)持ってきたで」

A 児 「ありがとう！」

C 児 「いいよ！また、(積み木)持ってくるわあ」

指 「Cちゃん、重たい積み木を頑張って運んできたんだ  
ね。凄いなあ。Aちゃんも、ありがとうって言えて素  
敵だね」

C 児 「また、(積み木)持ってきたで」一生懸命運んでいる。  
自立心、思考力の芽生え、協同性等

B 児 「ここに置いて ありがとう！」  
オオカミ役だが、一緒にレンガの家づくりをしている。

D 児 「Cちゃん、ここに(積み木)置いたら倒れるで」  
バランスが悪いことに気付く。  
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

C 児 「・・・」  
バランスが悪いことに気づき、扉のイメージでつくっ  
ている。

思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「Cちゃん、Dちゃんが教えてくれたから丈夫なレン  
ガの家になりそうだね」

C 児 「・・・」  
できあがったレンガの家で寝転がっている。  
豊かな感性と表現等

D 児 C児の姿を見て寝転び始める。  
「めっちゃ 気持ちいいなあ！」

A 児 「ここは、暖炉やねん」  
言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等

上手に積み木を重ねて空洞をつくり、小枝を拾ってきて  
暖炉に見立てている。

指 「ちょっと覗いてもいい？うわっ！薪もあって暖炉や  
ね。Aちゃん凄いね」

「Bちゃんオオカミ！レンガのお家がそろそろできた  
みたいだよ」

小さな声でオオカミになりきって話しかける。

B 児 「うん！」

指・B児 「クンクンクン 子ブタのいい匂いがするぞ！よし、  
子ブタを食べてやろう。1、2の3フーッ！あれ？  
吹き飛ばないなあ」

知 指導者がオオカミ役になりきって、や  
り取りする楽しさを味わえるように  
する。

徳 友達や指導者と楽しさを共有する。

知 指導者がオオカミ役になりきって、イ  
メージを膨らませて言葉のやり取り  
を楽しめるようにする。

徳 友達と遊びを共有しながら進めてい  
く中で、互いの良さに気付けるように  
する。

徳 子ども同士のやり取りを見守り、遊び  
を進めていく面白さに気付けるよう  
にする。

知 バランスよく積むことの気づきを認  
め、続けて自ら考えていけるようにす  
る。

徳 子どもの気づきに共感し、C児とD児  
の心の橋渡しとなるように言葉で伝  
え合うことを心掛ける。



知 子どもたちが試行錯誤しながら暖炉  
や家をつくりあげた達成感や満足感  
を受け止める。また、オオカミになり  
きって、好奇心が高まるような言葉が  
けを工夫する。

B 児 「もう、怒ったぞ！煙突から入ってやる！」

指 「そうしよう！」

言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等

指・B 児 一緒にレンガの家の暖炉に飛び込む。

B 児 「アチチチチ!!お山まで逃げよう！」

指 「アチチチチ!!」

指・B 児 お尻に手を当てながら、園庭にある小さい土山まで逃げる。

B 児 「ここに水があるから入って！」

指 「チャボン！あーお尻が熱くなくなってきた！」

B 児 「お尻に絆創膏貼ろう！」

指 「貼って貼って！Bちゃんオオカミさんにも貼ってあげる！」

B 児 「うん！もう1回レンガのお家に行こう」

指 「今度は吹き飛ばすぞお！」

言葉による伝え合い等

○この後も繰り返しオオカミと子ブタのやり取りを楽しむ姿が見られた。子ブタはオオカミが逃げると「オオカミさんこっちおいでえ！」と声をかけ、オオカミが暖炉に飛び込むのを楽しんでいた。

○数日後、子ども同士で役に分かれてやり取りを楽しむ姿が見られた。



知・徳 子どもの思いに共感し、お話の面白さや楽しさ味わえるようにする。

知 お話の世界を楽しみイメージを広げて遊べるように、指導者も子どもたちと役になりきることで、他児にもごっこ遊びの楽しさを知らせる。また、言葉で伝え合う面白さに気付けるように一緒に会話を楽しむ。

### 【考察】

・大好きなおうちごっこの経験を生かし、家づくりではイメージを広げ遊ぶことができた。また、指導者もオオカミになって遊ぶことで、お話の面白さを感じて役のイメージを広げることにつながった。

(思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、言葉による伝え合い等)

・『3びきのこぶた』の絵本の読み聞かせを通して、子どもたちが好きな場面を取り上げ、子ブタやオオカミになりきって遊んだり、レンガを運ぶ場面でも実際に重い物を運んでみたり、実体験に基づいた活動が子どもたちの心を揺さぶり、語彙が増え、言葉のやり取りを味わい、楽しむきっかけになったのではないかと考える。

(協同性、思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、言葉による伝え合い等)

### 今後に向けて

・友達と思いを出し合い、言葉で伝え合う経験や折り合いをつけながら生活を積み重ねていくことで「友達と一緒にだから楽しいなあ」と思える基礎となっていくことが分かった。このような経験を積み重ねていくことで、友達と思いを出し合いイメージを広げ、遊びを展開していく力になると考える。また、ごっこ遊びの中で、子どもたちがなりきった役の気持ちを、指導者が意識して言葉で表現していき、言葉の獲得にもつなげていきたい。

『3びきのこぶた』 作絵：いもと ようこ (金の星社)

みんなと一緒にだから楽しいな

～（『バナナ鬼』ごっこを通して）友達と一緒にルールのある遊びを楽しむ～

<これまでの取組>

5月より、部屋にある忍者の絵本に興味をもち、忍者のイメージを広げ、なりきって友達と協力して色々な変身の術を考える姿が見られた。

10月になると、簡単なルールのある集団遊びを楽しめるようになり、特に子どもたちが考えた忍者の変身ポーズの一つである『バナナ』の表現をする鬼ごっこが楽しかったようで、「先生、『バナナ鬼』しよう！」と指導者を誘っては、一緒に楽しんできた。その中で、「タッチされても『バナナ』になれへん」「何回もタッチするの、嫌な気持ちになる」などの意見が出て、その都度、指導者が仲立ちしながら、互いの思いが伝わるように話し合ってきた。

12月に入り、子どもたちだけで集団遊びを楽しむ姿が見られるようになってきたが、『バナナ鬼』では、繰り返し遊ぶ中で、ルールがあやふやになり、遊びが途切れることがあったので、どのようにすれば遊びが楽しくなるか、みんなで考えられる場をもつことにした。

<本活動のねらい>

- ・ルールのある遊びを友達と一緒に楽しむ。
- ・友達と遊ぶ中で、自分の思いを伝えたり、友達の思いに気付いたりする。

<本活動での教育的意図>

- ・ルールの分かりにくいところを、みんなで相談して決めたり、視覚教材を用いたりすることで、みんなルールを共通理解して、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようにする。
- ・子どもたちの考えや意見を受け止めたり、友達の気持ちに気付かせたりしながら、安心して自分の思いを出し、聞いてもらえる満足感を味わえるようにする。

子どもと指導者の姿 指-指導者 子-子ども  
幼児期の終わりまでに育てほしい姿

視点 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○前日の振り返りの時に、『バナナ鬼』ごっこを、どうすれば楽しく遊べるかをみんなで話し合おうと伝えていた。

A 児 「先生、今日『バナナ鬼』の話するって言うてたで」

指 「よく覚えてたね。先生、『バナナ鬼』のカード作ってきたんやけど…」

『バナナ鬼』の絵カードを見せる。

B 児 「うわあ！凄い！」

C・D 児 「前、私が色塗ったやつや！」

指 「みんなが『バナナ鬼』が好きやから、もっと楽しくなるように、カードを作ろうと思って。色塗るのを一緒にしてくれて助かったわ」

E 児 「あ、タッチされてるところや！」

F 児 「タッチされてバナナになってる！」

指 「つかまった子はどうなってるかな？」

D 児 「仲間がタッチしてくれたら逃げられる」

指 「タッチでよかったんかなあ？」

E 児 「むいてもらって逃げてる」

A 児 「ムキムキって言いながら皮むく」

知 子どもが思いを話したり、聞いた  
 りする機会をつくり、子どもたちと  
 共に遊びを進めていくようにする。

知 子どもたちと決めてきたルール  
 が、より分かりやすく伝わるよう  
 に、『バナナ鬼』の場面に  
 応じたカード（視覚教材）  
 を取り入れ、ルールを  
 理解して遊びを楽しむ  
 ようにする。

徳 子どもたちから出た意見や考えを  
 受け止め、共感し、自分の  
 考えを出し合える環境を  
 作る。

指 「何か分からないところあったかな？」  
 G 児 「お月さんみたいになってるのは逃げられるん？」  
 道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等  
 絵を見ながら言う。  
 H 児 「かたっぽしかむけてへんやん」  
 I 児 「あかん」  
 協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え等  
 指 「じゃあ、みんな、どうしたらいいかなあ？」  
 A 児 「こうやったらいい！」  
 その場で『バナナ』の皮が、「ムキ」「ムキ」と言いながら  
 1 枚ずつむける動作をする。  
 指 「Aちゃん、いいこと考えたね！前に出て来て見せてく  
 れる？」  
 指 「Iちゃん、前、上手に『バナナ』になってたね。A ち  
 ゃんのこと、手伝ってくれる？」  
 I 児 前に出て来て、自ら『バナナ』になる。  
 A 児 『バナナ』の皮をむく動きをして見せる。  
 子 「うんうん・・・」  
 言いながらうなずいている。  
 J 児 「先生、早く『バナナ鬼』しよう！」  
 O 所庭に出て『バナナ鬼』をする。  
 J 児 「ムキムキって言うてへんかった」  
 H 児 「タッチされて逃げた」  
 指 「どうやったら逃げられるのかな？」  
 A 児 「ムキムキって言って皮むいてもらう」  
 G 児 「2つ皮むくねん」  
 指 「そうやね。今度は、そこに気をつけてやってみよね」  
 指 「他に、何かあったかな？」  
 D 児 「鬼に、お腹をポンってされた」  
 H 児 「お腹は痛いからあかんで」  
 指 「そうやね。どうしたらいいのかなあ？」  
 K 児 「強くタッチしたら痛い」  
 C 児 「優しくタッチする」  
 L 児 「背中にタッチしたらいい」  
 健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等  
 指 「背中の方がいいのかな？」  
 指 「そこにも気をつけてやってみよか？」  
 B 児 「もう1回しよう！」  
 F・G 児 「やろーやろー！」  
 O 2 回目は、味方を助けるときのやり方や、タッチするときの  
 加減の仕方について意識しながら遊んでいた。  
 健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え等  
 しばらくして、  
 A 児 「誰かあ！」  
 鬼にタッチされ『バナナ』になり、叫んでいる。  
 L 児 (鬼) A 児の様子に気が付き、チラチラと見ている。  
 A 児 味方にタッチされる機会が無く、鬼ごっこが終わる。

徳 遊びのルールの中で分かりにくい  
 ところについて、思いや考えを出し  
 合い、指導者が丁寧に聞きとりなが  
 ら、子どもがイメージを広げて、分  
 かるように話し合いをする。

知 遊びのルールが、より分かりやす  
 く、遊びが楽しくなるように、子ど  
 もたちと一緒に考え、伝えようとす  
 る姿を見守り、友達に広げていく。

徳 自分の意見や表現が指導者や友達  
 に伝わった満足感を味わえるよう  
 に共感し、認め合えるようにする。

徳 遊んだ後で、困ったことや感じた  
 こと等を出し合い、子どもたちの意  
 見を受け止め、互いの考えや思い  
 に、子どもたちが気付けるように仲  
 立ちをする。



徳・体 体を動かして遊ぶ中で、危険な  
 ことに気付いたり、友達の思いに気  
 付いたりできるように仲立ちをす  
 る。

徳 子どもたちとルールを確認した  
 後、ルールを守って遊ぶことの大切  
 さを感じ、意識しながら遊ぼうとす  
 る気持ちがもてるように言葉かけ  
 る。

徳 元気のない友達の様子に気が付い  
 た子どもが、友達の気持ちに寄り添

しょんぼりしてみんなの所に歩いてくる。

L 児 A児に近付き、「バナナして」と言う。

A 児 「いやや！」

L 児 「なんで？」

A 児 一人テラスに座り、下を向いている。

指 「どうしたの？」

A 児 下を向いて黙っている。

L 児 A児の事が気になっていたので、指導者がA児の傍に来たのを見て、A児の様子を指導者に伝えに来る。  
「負けてしょんぼりしてる…」

指 「負けてしょんぼりしてるん？」

A 児 「誰もタッチしてくれへんかった…」

指 「タッチして欲しかったの？」

A 児 うなずく。

L 児 指導者の横で、A児のことを気にかけて見ている。  
自立心、道徳性・規範意識の芽生え等

指 「誰も気が付かなかったのかなあ？」

L 児 「大きい声で言ったら聞こえるんちゃう？」  
道徳性・規範意識の芽生え等

指 「Aちゃん、そうしてみる？」

A 児 うなずく。

指 「Aちゃんがしょんぼりしてるの、Lちゃん、ずっと気にかけてくれてたんだね。Lちゃん、優しいなあ！先生嬉しいわ！」

L 児 嬉しそうに、にっこりする。

A 児 すっきりした顔になり、遊び始める。

○その後、1、2か月経っても『バナナ鬼』で遊ぶ姿がよく見られ、異年齢児も一緒に入って遊ぶ姿も見られるようになってきた。  
社会生活との関わり等

う様子を見守る。



徳 気持ちを受け止めてくれる人がいる安心感を感じることができるよう、子どもの気持ちに寄り添う。

徳 友達の気持ちに気付こうとし、友達を思いやろうとしている気持ちを受け止める。

徳 辛い思いになった気持ちを聞いてくれる人がいる安心感を感じることができるよう、子どもの心の動きを十分に察して共感し、励ます。

徳 友達の気持ちに気づき、思いやりの気持ちをもって友達に寄り添った心の動きに感動した指導者の気持ちを伝える。

**【考察】**

・子どもたちが友達や指導者と一緒に鬼遊びを楽しみたいという姿を見逃さず、指導者が子どもたちとルールを共通理解する機会をもち、継続して遊びを楽しんできたことは、『バナナ鬼』の活動意欲が高まり、ルールを守って遊ぶことの大切さにも気付くきっかけとなったと考えられる。

(協同性、道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等)

・指導者が、子どもたちの意見をしっかりと聞く姿勢が、自分の意見を聞いてもらうことに喜びを感じ、友達の考えや思いも聞こうとする姿につながっていると考えられる。

(自立心、道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等)

**今後に向けて**

・友達や指導者が楽しそうに遊んでいる姿を見ると、クラスの子もや異年齢児も「楽しそう！」「一緒にやってみよう！」「真似をしてみよう！」という気持ちが芽生え、『バナナ鬼』に参加する姿が見られるようになった。指導者も共に遊び、ときには、いざこざの仲立ちとなることを繰り返していくことで、子ども同士で遊びを進めていけるようにしていきたい。